て示し，この種の研究が，未開拓の状態におかれ，いまだ充分に理解されない部分が多い点を指摘している。（口羽益生）

Kennedy, R.: Bibliography of Indonesian Peoples and Cultures. Behavior Science Bibliography, Revised edition. 1962. *pp.xxii+207*

本書はエール大学並にその附属の Human Relations Area Files によって出版されたインドネシアの民族と文化に対する文献リストである。元来は Raymond Kennedy によって編集せられたものであるが，改訂版は Thomas W. Maretzki 及び H. Th. Fischer 氏の努力に負うところが多い。

この種の書物がエール大学に於て出版されるに至ったのは George P. Murdock の努力に負うところが多く，すでに北米に関する文献が1941年に Yale Anthropological Studies 第一巻として出版されているが，まことに貴重な努力と感謝する外はない。民族と文化に限ったという点もあって驚嘆すべき充実ぶりである。

編集の仕方もまた用意周到であって，まず Alphabetical Key to Islands, Peoples, Tribal Groups and Tribes の章を設けて部族名，島名等を詳細にあげ，次に雑誌名等の略符をあげる。これが6頁にも及んでいる。いかに雑誌論文などが詳細に調査してあるかが判る。

文献リストはまず Indonesia 全体に関するものをあげ，次に Sumatra, Borneo, Celebes, Java (and Madura), Lesser Sunda Islands, Moluccas に分類してある。

この各項目の中で，例えば Borneo については General, Bahau group, Ngadju group, Land Dyak group, Klamantan-Murut-Kalabit group, Iban (Sea Dyak), Punan group, Coastal Malay Buginese etc., Chinese, Karimata Island に分けて文献をあげており，又その民族の分布図をかかげて誰にもよく判るようにしてある。

このような文献集ができ上るためには国際的な協力がなされており，例えば Cornell 大学の J. Echols, G. McT. Kahin, Library of Congress の C. Hobbs など国内の専門家はいうまでもなく，ライデンの Museum van Volkenkunde の J.P.B. de Josselin de Jong, R. E. Downs, アムステルダムの Tropical Institute の M. W. Reyers, ユトレヒト大学の J. Gond, A. Teeuw, ジャカルタ大学の G. J. Held 氏などその一部である。

このようなリストが出来るについての協力者の組織などについても教えられるところが多い。

（棚瀬襄爾）

Государственное издательство иностранных и национальных словарей: Индонезийско-Русский Словарь. Москва, 1961, *pp. 1171*

An Indonesian-English Dictionary. Cornell University Press, Ithaca. Second edition 1963. *pp. xviii+431*

最近，ソ，米からインドネシア語辞典の大冊が出た。前者は R. N. Korigodosky 他四人の編集で収容語数は45000とする。後者は J. M. Echols と H. Shadily の手に代るもので概算20000の見出し語数。語数は後者の方が少ないが序文にもある通り，現代の文献を読むに必要なものに制限したせいであろう。前者は古代の文学をも読解し得る語をも入れたとあり，又，民俗，習俗，生物語彙もこの方がずっと多い。後者は語彙は少ないが，各語の文例が相当詳しく出ている。辞書の生命は単に意味の対応訳を掲げるのでなく，いかにその語の適当な文例，使用例が出ているかにある。この点で後者は前者に優る（もっとも，完全という訳ではないが）。後者によって，所謂，辞書を読むこともできる。インドネシア語の特徴は語根語に接頭，接尾辞が付いて更に一つの単語が形成されるところにある。語根語に接続可能な凡ての接辞を網羅的に示し，その用例をも掲げた辞書をもって最も完璧なものといえるのである。この両書には出ていないが，Saja be-rumah dikampung ini. <私はこの村に家（を）持つ。rumah＝家>のような用例を示していたらきりがないが，この点で両書は氷山の一角を載せているにすぎず，従来の辞書の域を全く脱していないといえよう。実際の言語の機能の状態はこの両書によってもまだまだ知り得ない。そのような意味での甘さがあることは充分念頭に置く必要がある。

次に音声，表記の説明であるが，ソの方はまだまだ米の構造主義言語学の風が吹き込んでいないらしく（私見では，全く興味を持っていないといえる），旧来